

山上に築かれた惣ヶ池遺跡—和泉市の高地性集落について—

和泉市教育委員会 文化財振興課 上田 裕人

1 高地性集落と和泉市

弥生時代中期～後期から始まる丘陵上に形成された集落は、「高地性集落」と呼称されている。高地性集落についてはこれまで立地の特性から攻撃に対する防御といった機能論が中心に議論が行われてきた。また研究者によって定義や概念が異なっていることから、集落論においても一定の方向性が示されていないのが現状である。さらに「高地性集落」という用語自体が、概念的な言語になっており、確固とした意味を持たず曖昧なまま研究や議論の俎上へと上がっている。このことが「高地性集落」研究を停滞させてしまっている大きな要因である。

和泉市の平野部には拠点的集落の池上曾根遺跡が弥生時代中期後半まで営まれていた。池上曾根遺跡が衰退するのと時を同じくして、弥生時代後期に観音寺山遺跡・惣ヶ池遺跡・大野池遺跡が丘陵上に突如として出現する。これらの3集落それぞれが丘陵の平坦面を巧みに利用して、多くの竪穴建物を築きながら弥生時代後期（約100年間）の間、山上に居を構える。

今回は、令和3年度に惣ヶ池遺跡でおこなった発掘調査で、多くの興味深い成果があったのでご紹介し、それらを用いて和泉市の高地性集落について考察します。

2 高地性集落とは？

「高地性集落」—弥生時代後期において、水稻耕作に適さないと考えられる高所の山頂・山腹・丘陵上に、形成された特異な集落

「弥生中期～後期、大阪湾沿岸から瀬戸内海沿岸の海拔100mを越える山頂・丘陵上に営まれた軍事・防衛的な小集落。畑作集落説・祭祀遺跡説などあるが、軍事・防衛的機能を重視する説が有力。この頃、激しい争いがあったことを思わせる。」（全国歴教研協 2013）。

➡現在でもなぜ山の上に集落が動いたのか分かっていない

ただ、以前から考えられていた「倭国大乱」とは結びつかない

防御・防衛・軍事などだけでは考えられない様々な用途を考える必要がある

➡今回の惣ヶ池遺跡の発掘調査では「高地性集落」を考えるための多くの成果があった

3 和泉市の高地性集落

○和泉市の高地性集落の概要

i 観音寺山遺跡

観音寺山遺跡は、和泉市弥生町に所在している。集落は、和泉山地からのびる丘陵上で、眼下に大阪湾岸の平野部を望むことが出来る。二つの尾根で検出された集落群は標高50～60mに位置し、周辺の平地からの比高差は約25mあり、集落の北・南側には河川が流れる。観音寺山遺跡から西方向に約4kmには、大型環濠集落の池上曾根遺跡が所在している。多くの研究者は、池上曾根遺跡が衰退し、その住民が観音寺山遺跡に移住したと考えられている。

独立した丘陵上の二つの尾根の平坦地全面に築かれた観音寺山遺跡は、南側の丘陵では長さ約350m、幅80mの範囲に81戸の竪穴建物、溝状遺構が検出されたE地区、その50m間隔を空けた所に7戸の竪穴建物が検出されたW地区、北側丘陵では29戸の竪穴建物が検出されたN地区がある。竪穴建物の総合計117戸の大型の集落と考えられる。

総計 117 戸の竪穴建物の中には、鉄製品が 11 戸の竪穴建物・一つの溝において検出されている。主な鉄製品は、鉄鏃・鉄斧・刀子などである。また観音寺山遺跡の外側には広い範囲で数条の環濠が存在し、遺跡全体に回るものと考えられる。一部の斜面では地山を人工的に約 30～45 度の傾斜をつけた段状遺構が検出されている。

弥生土器は大半のものが V 様式にあたり、弥生時代後期前葉～後葉に丘陵上に集落が営まれていたことが分かる。

ii 惣ヶ池遺跡（令和 3 年度発掘調査前の評価）

惣ヶ池遺跡は、標高 50～60m の信太山丘陵の頂部に位置しており、弥生時代後期に出現する集落である。数次にわたる調査によって 10 棟以上の竪穴建物が検出されている。遺跡の範囲は、約 3 万㎡を有し、和泉地域でも有数の高地性集落である。集落からの眺望は優れており、空気が澄んでいる日には大阪湾を挟んで神戸まで見える。

惣ヶ池遺跡では、観音寺山遺跡や大野池遺跡で検出されているような集落全体を囲む溝や、区画する溝は現段階では検出していない。これまでの発掘で明らかにされた範囲は、集落の中心部でありその周囲の状況は未だ明らかにしていない。観音寺山遺跡や大野池遺跡などの状況から、惣ヶ池遺跡も集落外縁部には溝状遺構がある可能性も考えられる。

10 棟以上の竪穴建物が検出されているが、この内鉄器が出土している建物は 4 棟（1970 年調査竪穴住居 1・3・4、2013 年調査竪穴住居 1）である。惣ヶ池遺跡で出土している土器は、多くが第 V 様式の範疇に納まるが、小破片のものが多いため詳細な集落継続期間が定かではない。

iii 大野池遺跡

大野池遺跡は、大野池東岸の丘陵上標高 46m に位置し、弥生時代後期に出現する集落である。丘陵頂部に溝で区画された空間を設け、それを取り巻くように斜面地に平坦地を造成して竪穴建物を構築していた。発掘調査では二段の造成地を確認したが、地形から考えて、調査区外にもう一段程度の造成地が存在した可能性がある。また集落中心部に居住空間ではない一画を有していること、集落成立時に大掛かりな造成をとまなっていることから、通常の集落とは若干異なる様相も看取できるが、集落規模としては決して大きくはない。

大野池遺跡では、竪穴建物 6 棟検出されている。鉄器の出土している竪穴建物は無い。出土している土器は、第 V 様式の範疇に納まるが、弥生時代後期後葉に限られている。このため大野池遺跡は、ごく限られた短い期間の集落であったと考えられる。

4 令和 3 年度惣ヶ池遺跡発掘調査成果

調査目的－市道信太 5 号線整備・信太山丘陵里山自然公園活動拠点施設建設に伴う発掘調査
調査面積－約 580 ㎡（信太 5 号線：400 ㎡ 活動拠点施設：180 ㎡）

調査期間－令和 3 年 7 月～10 月

・市道信太 5 号線整備に伴う発掘調査

検出遺構－竪穴建物 4 棟、溝 1 条、柱穴約 200 基

出土遺物－小形仿製鏡 1 面、石包丁 1 点、石鏃 1 点、弥生土器（後期前葉？～中葉）

各遺構の概要

竪穴建物 1－円形 直径 6.8m 6 本柱 周壁溝（一部二重→建替え 1 回）

中央穴周辺直径 2.6m の範囲で炭、焼土が固く焼け締まる

中央穴を挟んで小判形土坑がハの字状に穿たれる

小判形土坑－0.9m×0.5m 深さ 0.7m 底部に段差がある

周壁溝から外部に溝（標高の高い所から低い所に向けて設置→普通は逆）

竪穴建物 2・3－円形？ 周壁溝と柱穴の一部のみの残存のため詳細不明

竪穴建物 4－方形 周壁溝の一部を検出

溝－幅 2～2.5m 深さ 0.25m

→環濠集落にあるような深く逆台形のような溝ではなく、緩い円弧を描く溝＝区画溝か？

柱穴－200 基余り 調査区の北側に集中→掘立柱建物が数棟復元可能

小形仿製鏡－中国大陸で製作された前漢鏡を模倣して国内で作られた鏡

竪穴建物 2・3 の近くの L 字形土坑から出土

直径 6.4cm、厚さ 1～1.3mm

鏡の外側の縁が狭く、断面はかまぼこ状

鈕（紐を通す部分）は円形

文様は不鮮明だが擬銘帯（前漢鏡の文字をモデルにした文様）

近畿最古級

泉州唯一出土鏡

・信太山丘陵里山自然公園活動拠点施設建設に伴う発掘調査

検出遺構－竪穴建物 4～5 棟、溝 1 条、柱穴約 100 基、塹壕（近現代の戦争遺構）

出土遺物－砥石数点、敲石数点、弥生土器（後期前葉？～中葉）

各遺構の概要

竪穴建物 1－円形 直径約 10m（全体の半分を確認） 6 本柱？

非常に残りが良い竪穴建物（検出面から床面まで深い所で 60cm）

周壁溝や主柱穴の重複が無い、建て替えは行われていない

中央穴の周辺に炭・焼土が集中する範囲

炭・焼土集中範囲を囲むように方形の溝を掘削

床面の一部が火を受けて赤く焼け締まっている

出土遺物に砥石、敲石などがある

➡鉄器の鍛冶工房である可能性が非常に高い建物

大阪府内で初例の鍛冶炉構造である可能性が高い

同じような鍛冶炉構造は、淡路島や四国地方で確認されている

竪穴建物 2－方形 周壁溝の一部を検出

竪穴建物 3～5？－円形？ 周壁溝と柱穴の一部のみの残存のため詳細不明

上部が削平されている上に建物に重複があり、正確な棟数が不明

溝－幅約 80cm、深さ 10cm 調査区の端で確認したため詳細不明

塹壕－幅約 1m、深さ 80cm

黄褐色のしっかりした地盤を断面 U 字形に掘り込んでいる

内部から薬莢、真鍮製のボタン、陶磁器などが出土

➡近現代の遺構であるが、「戦争」を改めて考古学から考える上で非常に重要な遺構

5 惣ヶ池遺跡発掘調査成果の和泉史的意義

・惣ヶ池遺跡の集落規模と存続期間の再考

今回の発掘調査地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地域の南東端

→これまでは集落の端と考えられていた場所から、予想以上の遺構集中を確認

惣ヶ池公園の周辺は後期中葉～後葉の集落中心部、その前段階の集落中心部は本発掘調査付近

集落規模は、現在考えられているものよりさらに大きくなる可能性が非常に高い

観音寺山遺跡と同規模かそれよりも大きくなる可能性もある

- ・惣ヶ遺跡出土小形仿製鏡の意義

鏡の諸特徴から「近畿最古級、泉州唯一出土」

→小形仿製鏡の分布は播磨・摂津に多く、近畿中枢部の河内・大和は少ない

河内・大和よりも早期に貴重財を入手していた

西側から渡来する物品の流入ルートの再考（瀬戸内ルート、太平洋ルート）

これまで、小型仿製鏡のような貴重財が出ないと考えられていた泉州地域で初の出土

＝新たな弥生時代後期の地域社会を考えなければならない

- ・鉄器工房の確認

活動拠点施設調査区で確認した竪穴建物 1

→大阪府内初例の鍛冶炉構造

淡路島・四国地方と共通点のある鍛冶炉構造（瀬戸内ルート）

泉州地域は、弥生時代後期の鉄資源が少ない地域と考えられていたが、鉄資源の豊富な淡路島との共通点を確認した

6 和泉市の高地性集落の特徴と集落遷移モデル

- ・土器の問題

観音寺山遺跡・惣ヶ池遺跡・大野池遺跡で出土する土器の特徴

→第Ⅴ様式の範疇で納まる土器が出土（観音寺山遺跡・惣ヶ池遺跡は後期を通して集落が存続）

→在地で作られた土器が多い（一部他地域の搬入品と考えられるものも出土）

- ・鉄器、石器の問題

観音寺山遺跡・惣ヶ池遺跡・大野池遺跡で出土する鉄器・石器

鉄器—斧・鏃・ヤリガンナ・錐など＝実用的な目的で使用された物

惣ヶ遺跡では鉄器を製作していた

石器—斧・鏃・砥石・石包丁・敲石など＝実用的な目的で使用された物

- ・観音寺山遺跡・惣ヶ池遺跡・大野池遺跡と池上曽根遺跡の関係

乾 哲也—最盛期の池上曽根遺跡は、松尾川・槇尾川に開発拠点集落（山林などの物資を供給）を設置

→後期の池上曽根遺跡の衰退に伴い自らも開発拠点のリーダーとなり対峙する形

和泉市の高地性集落は、池上曽根遺跡の栄枯盛衰の基で出現したもの

→他地域との比較の際には大きな指標となるモデルケースの一つである。

→最盛期であった池上曽根遺跡が、急激に縮小（中期末）➡高地性集落出現（後期）

→隣ムラの府中遺跡も縮小し、後期前半には溝などがあるだけになる

→弥生時代中期後半の和泉市内の集落も軒並み縮小・散在傾向（軽部池遺跡・池田下遺跡・寺田遺跡 etc.）

現在思案中の集落遷移モデル

池上曽根遺跡➡惣ヶ池遺跡（居住域、工房域、祭祀域）・大野池遺跡（居住域、祭祀域）

府中遺跡 ➡観音寺山遺跡（居住域）➡府中遺跡（古墳時代以降は大園遺跡と並んで和泉地域の中心集落へ）

7 惣ヶ池遺跡発掘調査が高地性集落研究に与えるインパクト

・青銅器の早期入手

森岡秀人氏も指摘しているが、高地性集落は平地にある集落よりも早く青銅器などの貴重財を早期に入手している可能性がある。惣ヶ池遺跡の小形仿製鏡は、それを証左するための重要な要素となる。これが意味するものは、これまで考えられていた逃城や防御的な集落などの閉鎖的な高地性集落のイメージに反して、高地性集落は外に向かって開かれており様々な物品や技術を受容していた集落ということである。

・青銅器と鉄器工房を同時に確認

惣ヶ池遺跡は、青銅器と鉄器工房を同時に確認した数少ない高地性集落と考えられる。これまでこの二つが確認されている遺跡は、私が知る限り淡路島の舟木遺跡のみである。弥生時代後期の二大貴重財を持つ高地性集落の意味付けを今後行わなければならない。

・池上曽根遺跡の衰退要因

これまで、私は池上曽根遺跡の衰退要因を鉄器素材の流入ルートが河内地域中心となり、和泉地域で入手できなくなったからと考えていた。しかし、惣ヶ池遺跡の調査成果で再考しなければならなくなった。

【引用・参考文献】

- ・芦屋市教育委員会 1985 『増補 会下山遺跡』
- ・芦屋市教育委員会 2010 『兵庫県芦屋市 会下山遺跡確認調査報告書 遺跡分布範囲の確認を目的とした第8～10次発掘調査の成果』
- ・石野 博信 1985 『古墳文化出現期の研究』
- ・大阪府教育委員会 1980 『東山遺跡 大阪府文化財調査報告書』
- ・小野 忠熙編 1979 『高地性集落の研究 資料篇』
- ・小野 忠熙 1984 『高地性集落論』
- ・香川県三豊郡詫間町文化財保護委員会 1964 『紫雲出』
- ・金関恕 佐原真編 1986 『弥生文化の研究 7 弥生集落』
- ・川部 浩司 2009 『大和弥生文化の特質』
- ・関西大学考古学研究室 1977 『大師山』
- ・岸本 直文 2014 「倭における国家形成と古墳時代開始のプロセス」『国立歴史民俗博物館研究報告 第185集 共同研究 農耕社会の成立と展開—弥生時代像の再構築—』
- ・近藤 玲 1999 「二つの高地性集落—観音寺山遺跡と古曽部・芝谷遺跡の出現とその背景」『同志社大学考古学シリーズⅦ 考古学に学ぶ—遺構と遺物—』
- ・近藤 義郎 1959 「共同体と単位集団」『考古学研究』6—1
- ・高槻市立埋蔵文化財調査センター 1996 『古曽部・芝谷遺跡—高地性集落遺跡の調査—』
- ・武末 純一・森岡秀人・設楽博己 2011 『列島の考古学 弥生時代』
- ・都出 比呂志 1974 「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第80号
- ・寺沢 薫・森岡 秀人 1990 『弥生土器の様式と編年 近畿編Ⅰ・Ⅱ』
- ・同志社大学歴史資料館 1999 『大阪府和泉市 観音寺山遺跡発掘調査報告書』
- ・福家 恭 2012 「奈良県の高地性集落—近年の調査と研究を踏まえて」『みずほ』第43号
- ・村川 行弘 1984 「集落跡からみた高地性集落」『高地性集落と倭国大乱 小野忠熙博士退官記念論集』
- ・森岡 秀人 1986 「高地性集落性格論」『論争・学説日本の考古学 4 弥生時代』
- ・森岡 秀人 1986 「高地性集落」『弥生文化の研究 7 弥生集落』
- ・若林 邦彦 2009 「集落分布パターンの変遷からみた弥生社会」『国立歴史民俗博物館研究報告』149集

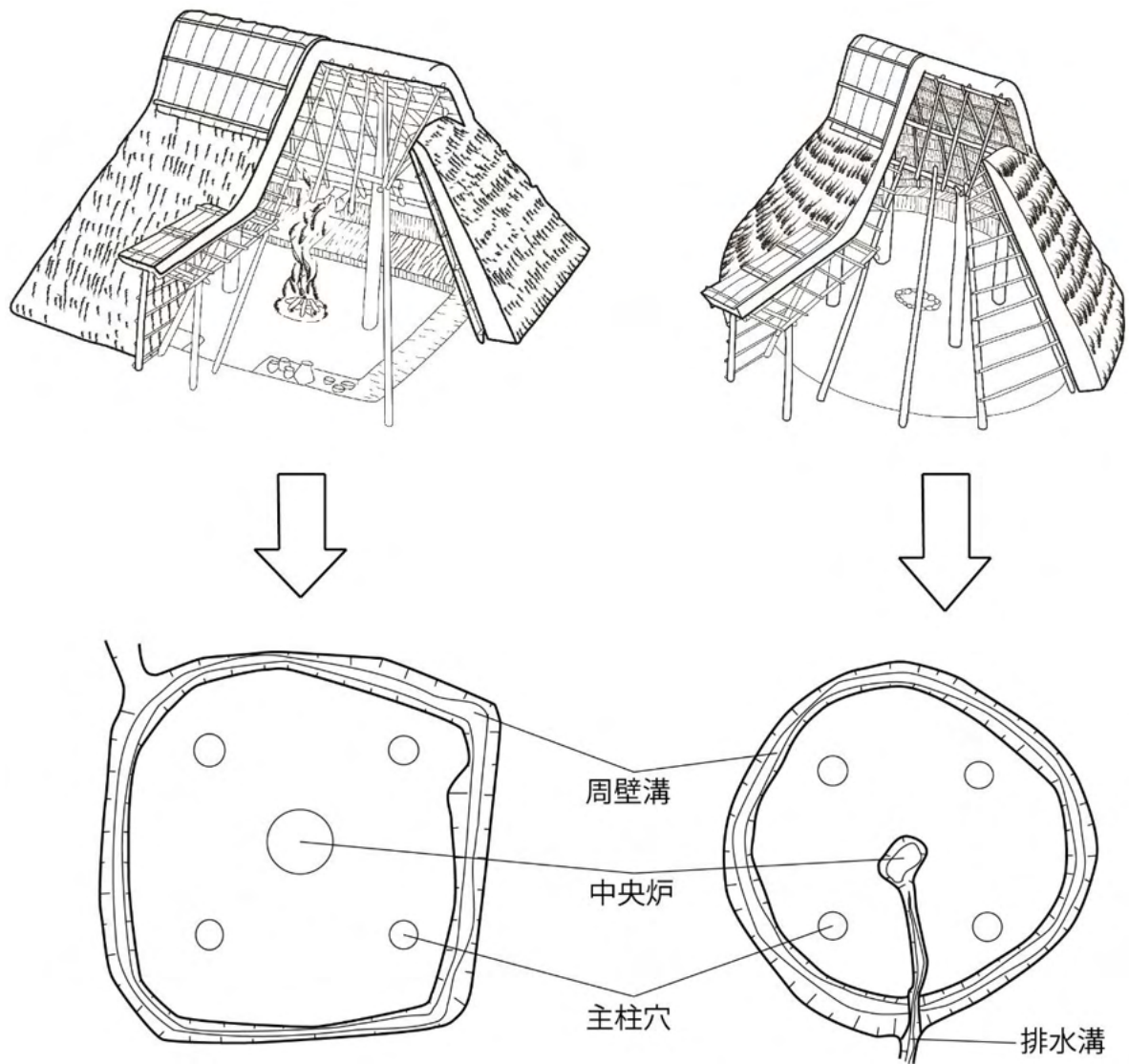


図1 竪穴建物の部位名称図



令和3年度 惣ヶ池遺跡 発掘調査地 位置図

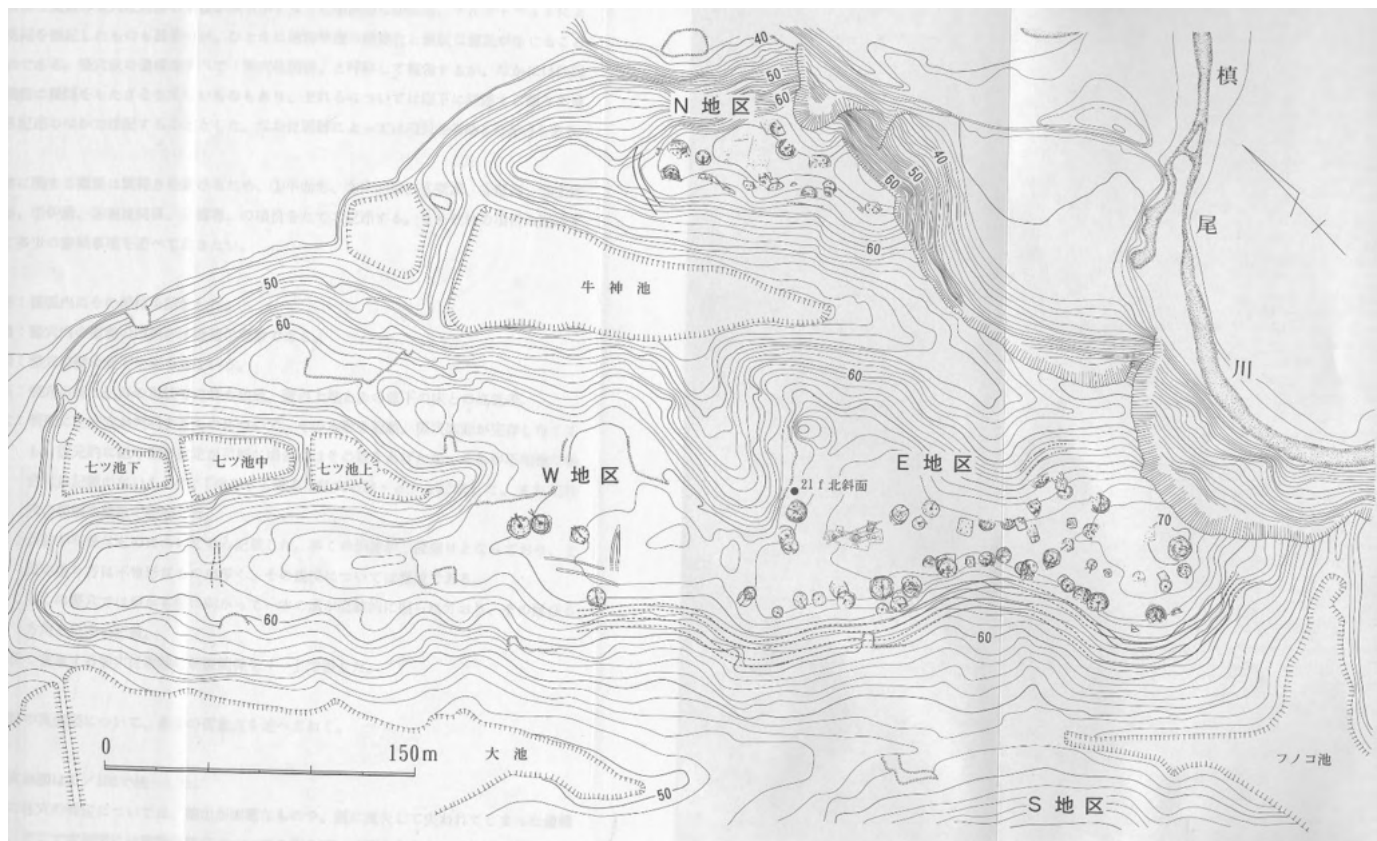


図3 観音寺山遺跡遺構配置図 (S=任意) (同志社 1999)



図4 大野池遺跡遺構配置図 (S=任意)

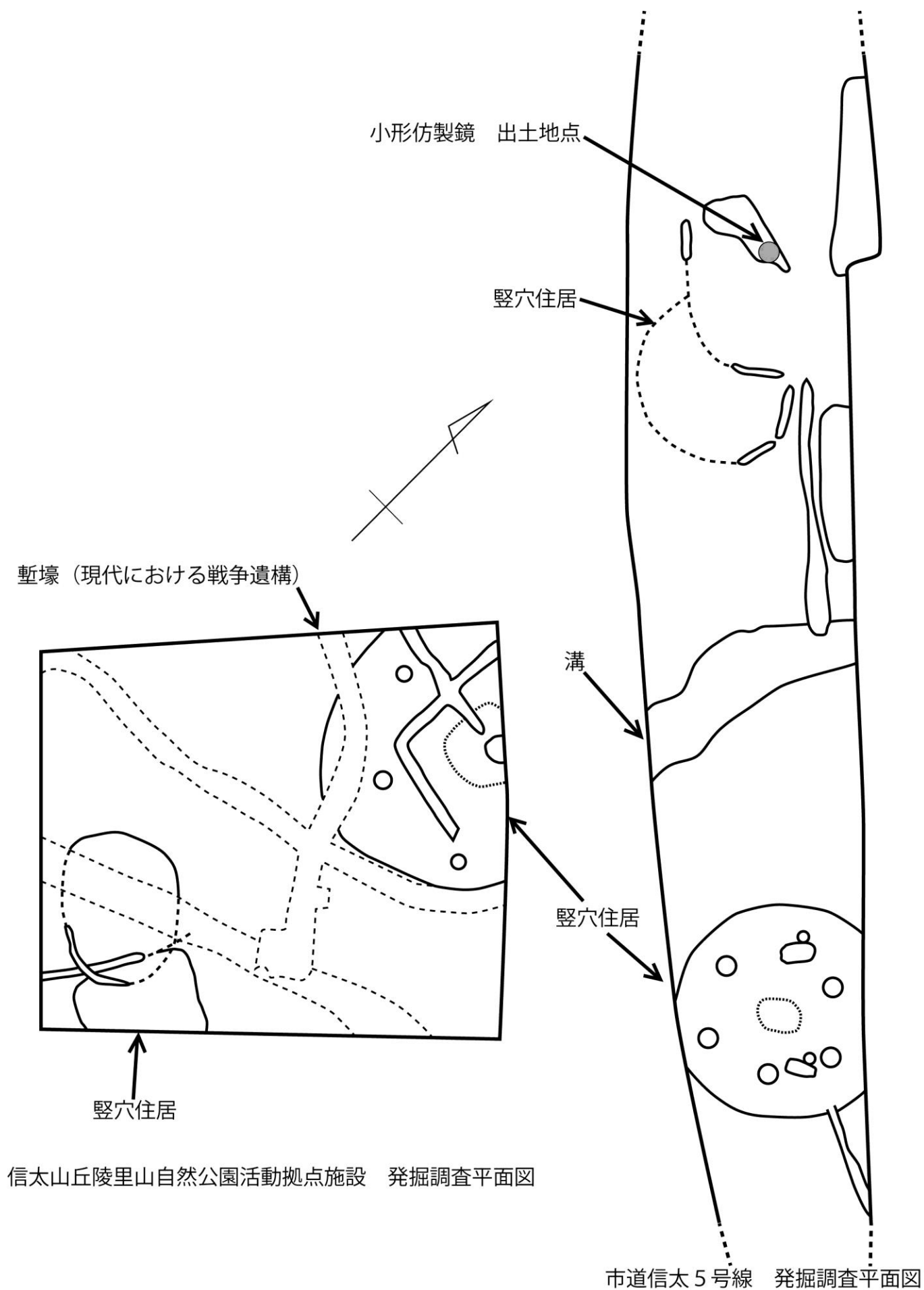


図5 令和3年度惣ヶ池発掘調査の概略図（S=任意）



信太 5 号線調査区 全景



小形仿製鏡 出土状況



小形仿製鏡 出土状況とレントゲン写真



信太 5 号線調査区 竪穴建物 1



活動拠点施設調査区 全景



活動拠点施設調査区 竪穴建物 1



竪穴建物 1 中央炉周辺



竪穴建物 1 中央炉